NPO法人河北潟湖沼研究所通信

かほくがた

豊かな河北潟に
夢のある干拓地に

東京・代々木公園
アースガーデン2017冬に出展しました

1月21日から22日にかけて、東京・代々木公園で開催された「アースガーデン2017冬」に出展しました。生きもの元気米・玄米がゆの試食をしながら、生きもの元気米をはじめ、生きもの元気レンコンや七豊米、ヨシ原保全のヨシ刈りやヨシ舟、外来植物除去とすずめ野菜の活動等、河北潟の環境保全活動についてPRしました。生きもの元気米・玄米がゆはたくさんの方にご試食いただき、「おいしい」と評判でした。「病気の時にあるとよい」「他のレトルトのお粥と全然違う」との声も聞かれました。

アースガーデンへの出展は3回目になりましたが、来場される方は環境保全活動や農産物の農薬の使用状況等について関心の高い方が多く、農薬を削減し、田んぼの生きものを守る生きもの元気米の取り組みについて、耳を傾けてくださり、応援の言葉をくださる方もたくさんいらっしゃいました。生きもの元気米の中でも農薬不使用の田んぼのお米は、スーパー等ではなかなか手に入れることができない、と特に喜ばれます。それに加えて作った田んぼの環境や栽培状況、生産者の情報がわかることは、さらに安心につながるようです。

CONTENTS

アースガーデン2017冬に出展 1p
河北潟の仲間たち・44「クサガメ」 2p
河北潟クリーン作戦実行委員会 3p
渡良瀬遊水池視察報告 4p
河北潟を資源として見てみよう アピールする方法を考える研修会 6p
生きもの元気レンコン誕生 7p
お知らせ・活動案内 8p

Vol.22-4
2017年3月31日

第44回　クサガメ

河北潟で自然観察会をするときに、子供たちに人気No.1の生きものがカメです。河北潟では、カメと名が付くものとしては、イシガメ、クサガメ、アカミミガメ、カミツキガメが記録されていますが、イシガメはこの20年くらいは確認されておらず、河北潟では幻のカメとなっています。

現在、河北潟でよく確認されるのは、アカミミガメとクサガメです。アカミミガメは北米産のカメで、もともと河北潟にはいなかったものですが、現在は、河北潟で最も多く生息するカメとなってしまいました。日本では、1960年代頃から野外で繁殖するようになり、日本の侵略的外来種ワースト100にも選定されています。やや気の荒いカメで汚濁にも強く、在来の淡水カメ類や餌となるるさまざまな水生動植物に影響を与えているとされています。

クサガメは、かつては日本古来のカメとされていましたが、最近になってもともとは日本人にいなかったカメで、江戸時代以降に朝鮮半島や中国から持ち込まれたものが拡がった外来種であるとする研究結果が発表されています。私たちにとっては身近なカメであり、最近はアカミミガメとの競争に負けて数が減っていることから、河北潟レッドデータブックでは、保全対象種として取り上げています。ニホンイシガメとの交雑も起こることから注意は必要ですが、身近な生きもののクサガメが身近なままであるように、クサガメの生息環境を守る取り組みとして、河北潟周辺では「生きもの元気米」の取り組みを進めています。

クサガメの特徴は、甲羅に3つの隆起（キール）があることです。また、アカミミガメに比べると甲羅が上下に長い楕円形をしています。顔の横に黄色や薄黄緑色の不規則な斑紋や斑点が入るのも特徴のひとつです。また、クサガメは漢字で書くと「臭亀」です。天敵に出会うと臭腺と呼ばれる器官から臭いにおいを出します。

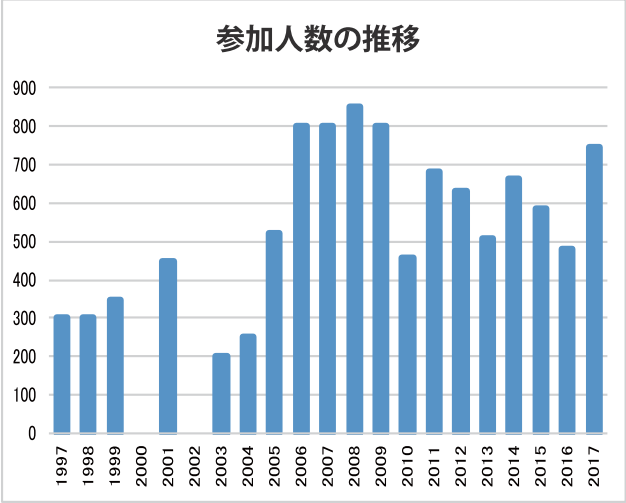
カミツキガメは河北潟では最近になって見つかったカメです。北米産で特定外来生物にも指定されている種で、在来種への影響や凶暴性から問題があるとされる種です。千葉県の印旛沼では、1987年にはじめて目撃されたとされ、2002年には繁殖が確認されています。2007年から駆除が始まっていますが、この10年間で16倍に増え、2015年には1万6千匹が生息すると推定されています。一旦定着するととてもやっかいな外来生物ですが、どうも河北潟に居着いてしまっているようです。まだ数は多くないので早急な対策が必要とされます。（文：高橋　久）

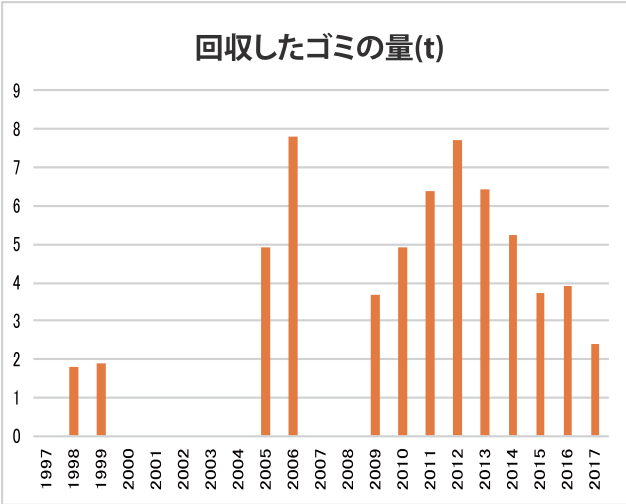
河北潟クリーン作戦実行委員会

昨年4月より次回の河北潟クリーン作戦の実施主体について、行政との折衝を続けてきました。これは、これまで河北潟クリーン作戦を主催してきた河北潟自然再生協議会が高齢化等により主催を続けることが困難となってきたためで、かつて河北潟クリーン作戦の事務局と主催を河北潟関係2市2町から引き継いだ経緯から、再び2市2町へ戻そうという試みでした。しかし、2市2町からは主催を拒否する通知があり、河北潟の環境保全にとって重要であり、また市民に定着している河北潟クリーン作戦を継続するためには、市民主体での実施体制を再び確立することが必要とされました。そこで、河北潟自然再生協議会だけでなく、これまで河北潟クリーン作戦に参加してきた団体に呼びかけたところ、賛同いただける団体があり、実行委員会を立ち上げることができました。2市2町は実行委員会の立ち上げには一貫して関与しない姿勢でしたが、クリーン作戦実行委員会主催による2017年のクリーン作戦の実施に対しては、これまで通りの協力をすることを約束しています。また、実務軽減のための新たな協力についても言明しています。こうした経緯を経て、これからの河北潟クリーン作戦は、市民主体で実施し行政が協力するという体制が明確となりました。それぞれの立場が明確となった新たな協働により、河北潟クリーン作戦の新たな展開が期待されます。同時にこの間の折衝を通じて、かつてと比べ行政としての河北潟の環境対策への主体性の発揮に問題があると感じられ、河北潟の環境保全において、今後の課題です。

2017年度の河北潟クリーン作戦実行委員会は以下の団体より構成されます。さらに多くの団体の参加を求めています。

河北潟クリーン作戦実行委員会構成団体：
河北潟自然再生協議会、河北潟干拓土地改良区、河北潟沿岸土地改良区、湖南地区町会連合会、大浦校下町会連合会、ＮＰＯ法人河北潟湖沼研究所、かほく市勤労者協議会、津幡の水辺を守る会、北陸ランカースナイパーズ、河北潟ボートクラブ ア・リバーランズ。（文：高橋　久）





わたらせゆうすいち
渡良瀬遊水地

北関東にある渡良瀬遊水地では、市民が行政と協力しながら、水辺の環境保全活動を行っています。その内容はヨシ刈りや外来植物の除去等、河北潟での活動と似ている部分もあります。渡良瀬遊水地での環境保全活動について学び、今後、河北潟で市民や行政、教育機関等さまざまな主体が連携した環境保全活動を展開する参考とするため、2月11日から2月13日にかけて視察を行いました。この視察では「わたらせ未来基金」のみなさまに大変お世話になりました。なかでも事務局長の内田孝男氏には、3日間にわたってご案内いただき、おかげで渡良瀬遊水地での活動について大いに学ぶことができました。

2月11日、まず最初に渡良瀬遊水地全体を見渡せる展望台へ行き、全体の位置について説明を受けた後、遊水地内に降りていき、活動現場等をご案内いただきました。遊水地には広大なヨシ原が広がり、まっすぐ伸びた丈の高いヨシがたくさんあります。かつてはヨシを扱う業者が100以上あったそうです。チュウヒの姿もたくさん見えました。

＜屋敷林保全活動＞

渡良瀬遊水地は、かつてそこにあった「谷中村」を廃村にすることでできました。遊水地内にはその史跡がみられます。その一つである「屋敷林」を保全するための活動が行われています。渡良瀬遊水地では毎年3月に「ヨシ焼き」が行われていますが、この時の炎から屋敷林を守るため、屋敷林周辺のヨシやオギを刈り、防火帯を作っています。ヨシ焼きは湿地環境を守り、ヨシ原を保全するために行われますが、同時にこの活動によって、この地の歴史的な資産も守られています。屋敷林の近くには「水塚（みずか）」の名残もありました。周辺よりも小高くなったその場所は、昔、ここで暮らしていた人々が洪水時の避難場所、生活場所と

して作ったものです。洪水が頻繁に起こる低湿地で、水と共に人々の暮らしがあったことがわかります。この場所にもかつてヨシ業者が入ってヨシを刈り取っていたそうですが、オギが多くなってきたことから業者は入らなくなり、活動現場への「道」から自分たちで刈って作らなければならなくなったそうです。環境と歴史を守るために、地道に活動が続けられています。

遊水地内にはヨシ原浄化施設の上に展望台が併設されている所もありました。環境を保全しながら、平時には自然に親しむことができるよう、遊水地内には案内施設や看板等が設置されています。

＜ヤナギ・セイタカアワダチソウ除去作戦＞

2月12日朝、第2調節池で行われた「ヤナギ・セイタカアワダチソウ除去作戦」に参加しました。渡良瀬遊水地ではヨシ原保全のため、以前よりわたらせ未来基金の方々が乾燥化により増えたセイタカアワダチソウ、掘削した裸地に生えるヤナギの除去活動等を行っていますが、この「除去作戦」はこれらの活動を引き継ぎ、規模を大きくした形で小山市が主催しています。この日も地元の企業や高校等が複数、団体で参加していました。この除去作戦は年に数回行われ、ときには参加者が1,000名を超えることもあり、この日も700人ほどが参加していました。市民から始まった活動が、行政を通して幅広い層の人々に広がり、地域に根付いていることが伺われました。活動前には現場に来ていた小山市長・大久保寿夫氏と直接お話をする機会もいただきました。市長が現場に来てい

ることから、市役所職員も活動に出ざるをえない、と市長が冗談めかして仰っていましたが、行政のトップがこういった活動に積極的であることが、活動の広がりに大きな力となっていると感じられました。

この日は成長する前のまだ小さな時期に、大勢の手でたくさんのセイタカアワダチソウを抜き取っていきました。会場入り口では、この日除去する植物について説明された紙が渡され、また、わたらせ未来基金代表・青木章彦氏が立ち、実際に除去するセイタカアワダチソウ等の実物を片手に、時間差で訪れる市民に対し、どれを除去するのか、といったことを何度も繰り返し丁寧に説明しておられました。初めて参加する人も、とても参加しやすく、また効果的に除去活動が行われるような態勢が整えられていました。とても風の強い日でしたが、青空の下でたくさんの人が除去活動にあたっていました。市民と行政が連携した形で進めている環境保全活動として、理想に近い形のものではないかと思います。

＜第２調節池、環境学習フィールド1での活動＞

除去作戦終了後、わたらせ未来基金の皆様が活動を行っている現場、環境学習フィールド1を案内いただきました。ここにはヨシで葺いた観察小屋がありますが、この日はヨシ焼きに備えて葦簀を片付けていました。色々な活動をされていますが、ヤナギの駆除が一番大変だそうです。遊水地内で掘削されて裸地になったところがヤナギ林になってしまい、そこから種が飛んできているとのことでした。人が関わることで「湿地」を維持できるとのお話をお聞きしましたが、小さなヤナギがあちこちに見られ、人の手による地道な除去活動が、湿地やヨシ原を守るために重要であることが実感できました。活動現場は窪地になっており、そのためヨシ焼きの時にも火がまわらず残ってしまう、とのことで今年は窪地にも火がまわってくるようにと、刈り取ったヤナギ等を使って工夫されていました。

他にもこの日は、除去作戦が行われているのと同時間帯に市役所職員がスコップで土壌攪乱をしていたそうです。活動場所の一部で2014年に土壌を天地返ししたところ、タコノアシやエゾミソハギが復活したとのことで、条件をかえながら試行錯誤しており、毎年攪乱した所ではあまりよい状態にはならず、間隔をおいて攪乱した所のほうが良い状態になっているとのことでした。工夫しながら保全活動がすすめられている現場でした。

〈次号に続く〉（文：番匠尚子）

会場：津幡町文化会館シグナス研修室
講師：吉見精二氏

河北潟を資源として見てみよう

河北潟をアピールする方法を考える研修会

3月10日（金）13：30～16：00、滋賀県より吉見精二氏を講師に迎え、「河北潟を資源として見てみようー河北潟をアピールする方法を考える研修会」を開催しました。河北潟地域の自然環境を資源として見たときに、地域にどのような資源があるか、どのような商品が考えられるのかを「エコツーリズム」に焦点を当て、みんなで考えました。ここでの「資源」とは、利用したり実施することが地域の環境保全につながるものです。

研修会ではまず初めに、エコツーリズムについて吉見先生より講義いただいた後、ワークショップ形式で河北潟の資源について考えました。どんな商品か、地域の歴史、将来展望等、整理しながら考えた後、参加者全員が意見を発表しました。以下にその一部を記載します。

- 釣り体験を実施したい。
- 食がないのが課題。
- エコツアーにはルール作りが大事である。
- 特徴のある農業を推進したい。
- 河北潟を周遊できる遊歩道や「潟の駅」を設け、歴史がわかるようなウォーキングコースを作る。
- 親子で参加できる収穫体験や、調理試食体験の実施。
- 河北潟を周遊できるバスを運行させ、体験したいところで降りられるようにする。
- ヨシ舟を中央幹線排水路に浮かべ、乗船できるようにする。
- 伝統料理を伝え、体験できるようにする。
- 「生きもの元気米」をもっと広めていっていはどうか。
- ボート協会等に売り込んでいってはどうか。
- このような研修会も、料理を作り食べられるものであればもっと人が集まるだろう。

参加者は河北潟地域で色々な活動をされており、それぞれの視点から意見がありました。参加者からは、このような機会をまた設けてほしい、今回は時間が短く、もっと意見交換をする時間が欲しかった、といった感想がありました。河北潟地域の自然資源を活用した商品を考えるステップとなる研修会でした。

また、研修会前の3月9日午後と10日午前には、河北潟地域で活動をされている様々な方や、内灘町都市整備部地域振興課、かほく市産業建設部産業振興課、津幡町産業建設部交流経済課等周辺自治体の方に、それぞれどんな活動をしているのか、どんな地域の資源があるのか、講師の吉見先生と一緒にヒアリングを行いました。地域で活動されている方は、知ってはいましたがその活動内容等を詳しく聞いたことのなかったという方もおり、今回じっくりとお話を伺ったことで新たな発見もありました。周辺自治体とは、これまでは環境系以外の課との関係があまりなかったことから、新たな連携を考えるきっかけとなりました。

（文：番匠尚子）

生きもの元気農産物－
生きもの元気レンコン誕生

認証マーク

田んぼごとにお米を管理し認証する「生きもの元気米」の活動開始から3年目の平成28年、一枚の水田（OSa159）が水稲からレンコンに転作されることをきっかけに、「生きもの元気農産物」の認証をはじめました。

田んぼ（OSa159）では、2014年、2015年と農薬と化学肥料を使わずに生きもの元気米が栽培されましたが、生産者の事情により、レンコンに転作されることとなりました。2年間の取り組みにより、OSa159の米を希望する方も増えていただけに大変残念なことでした。しかし、米からレンコンに切り替わっても、「生きもの元気レンコン」として継続できるのではないかとの理事長の発言にはじまり、この取り組みが「米」にこだわるものではないことを再確認する機会となり、すべての農産物を対象にする方針となりました。

レンコン生産者の農事組合法人Oneの宮野義隆さんに「生きもの元気レンコン」を提案したところ、大変快く受け止めてくださり、契約を結ぶことができました。生物調査も継続し、生きもの元気米のホームページで詳細をご覧いただけます。

販売の際には「生きもの元気農産物」の認証マークをつけ、2016年10月から2017年2月まで、河北潟や首都圏のイベント、ネットショップ等を通して、たくさんの方に購入いただきました。太くて立派、粘りがあって美味しいと好評で、プレゼントにも喜ばれ、河北潟自然再生まつりでは地元パン屋さんによりレンコンのパンが作られました。

約3,500㎡の広い圃場で、たくさんのレンコンが生産されましたが、「生きもの元気レンコン」以外には販売されなかったそうです。2月になっても圃場に収穫前の蓮がみられましたが、残りのレンコンはすべて2017年産の種にされるとのことで、とても特別なレンコンになりました。レンコンが育つ様子や生きもの情報を、今年はもう少しこまめに発信していきたいと思います。2017年の秋もどうぞご期待ください。（文：川原奈苗）

生産者の農事組合法人One 副代表の宮野義隆さん

大きな葉が一面を覆い、白い大輪の花が咲きました。

贈答用の生きもの元気レンコン

琵琶湖からの視察団

3月15日には、滋賀県より「琵琶湖とつながる生きもの田んぼ物語推進協議会」の皆さまが、バスで河北潟と生きもの元気米の取り組みの視察に訪れました。

道の駅内灘サンセットパークで、4月より提供予定の「生きもの元気米カレー」を食べていただき、河北潟全体を説明、こなん水辺公園に移動して取り組みの詳細をお伝えしました。最後に生きもの元気米とレンコンの圃場をご案内し、生産農家の宮野さんのお話しを聞いていただきました。3時間ほどの短い滞在でしたが、たくさんの質問をいただき交流を深めることができました。

「琵琶湖とつながる生きもの田んぼ物語推進協議会」では、「魚のゆりかご水田」などの環境に配慮した農業の取り組みを進めながら、米の販路拡大に向けた情報発信等の取り組みを進めています。今後、私たちの取り組みの経験が、少しでも役に立てば幸いです。

田んぼの生物多様性向上10年プロジェクト 全国集会 in 川越

2月18日、埼玉県川越市で開かれた「田んぼの生物多様性向上10年プロジェクト全国集会in川越」にスタッフ1名が出席しました。各地の体験農業や地元農家と連携した取り組み等、全国の水田環境保全活動について情報収集するとともに、主に生きもの元気米についてポスターやパンフレットでPRを行いました。

第6回 田んぼ10年プロジェクト 地域交流会 inいすみ

2月25日、26日に千葉県いすみ市で開かれた地域交流会にスタッフ1名が出席しました。有機米の生産に成功したいすみ市ですが、付加価値をつけて販売するよりも先に、まずは子供たちに食べてもらいたいとの生産者の意見に始まって、学校給食に有機米を普及する取り組みが地域全体で協力して進められています。大変すばらしい内容の話を聞くことができました。

河北潟セミナー

2月28日、石川県立大学の皆巳幸也先生を講師にお迎えし、河北潟セミナーを開催しました。「温暖化と北陸の雪」をテーマに、降水の仕組みから北陸の雪の特徴等をお話しいただきました。温暖化により河北潟地域で降雪が減り降雨が増えていることをとてもわかりやすく説明いただき、温暖化による河北潟地域の治水や農業への影響について考えるきっかけとなりました。

Peace On Earth 311未来への集い

東京の日比谷公園で開催された「Peace On Earth」に参加しました。東日本大震災から6年が経過した3月11日、会場では追悼式がおこなわれました。ブースに来訪いただいた皆様に、生きもの元気米の仕組みを伝えるとともに、生きもの元気米や、温かい玄米がゆを試食・販売しました。

かほくがたの水辺を活かそう

河北潟干拓地の水辺をより良い状態に活かすためにはどうしたらよいのかをテーマに、河北潟干拓地基幹施設管理所を出発点に屋上～水路～農地を歩いて、施設の役割や生息する生物、成り立ち等を観察学習するとともに、施設の活用等についてアイディアを出し合いました。ワークショップでは大人チームと子供チームに分かれ、現在の良いところ、改善したほうが良いところ、こうなったらよい等のアイディアを出し合いました。

ヨシやオギなどの炭化実験

バイオマスエネルギーを利活用する様々な装置を製造している明和工業株式会社さんの協力をいただいて、ヨシとオギ、セイタカアワダチソウの炭化実験をおこないました。ヨシとオギが丸ごと炭になりました。生態系保全にむけて有効な利用をさぐっていきたいと思います。

編集後記

2016年度は、マルシェの毎週開催やネットショップの利用が増え、「生きもの元気米」「すずめ野菜」を広く大勢の方に食べていただけるようになりました 。今年もまた田んぼが増えます。よろしくお願い申し上げます。(N.)

かほくがた Vol.22-4
NPO法人 河北潟湖沼研究所通信
平成29年年3月31日発行

〒929-0342 石川県河北郡津幡町北中条ナ9-9
電話076-288-5803 FAX 076-255-6941
ホームページ http://kahokugata.sakura.ne.jp
E-mail info@kahokugata.sakura.ne.jp